

## 論説

### 『胡志明』から『アジャの孤児』へ

——その改編をめぐる——

豊田周子

はじめに

台湾人作家呉濁流（一九〇〇—七六）は、言論統制の極めて厳しい日本統治末期の台湾において、将来的に公表することを想定して、『胡志明』を秘密裏に書き続け、「光復」後に刊行した。『胡志明』（全五篇）は、その文学史的な重要性が指摘されながらも、近年まで第五篇の所在が不明であった。ところが二〇〇七年に、緑蔭書房より全篇が復刻出版されたことで、その全貌が明らかになり、研究の条件も整うこととなった。

筆者はこの『胡志明』を、日本統治期における台湾知識人の精神史を描出するために不可欠な作品として考察して来たが、なお検討の不十分なところがあった。<sup>(1)</sup>そこで再び二つの方向からテキスト『胡志明』についてアプローチを試みることにした。その一つは、『胡志明』を創作当時の歴史的文脈のなかで再評価することであった。中国

現代文学研究の第一人者である復旦大学の陳思和氏は、著書『中国当代文学史教程』において、時代の制約下に公表できなかつた文学作品を「潜在創作」(原文は「潜在写作」という用語により定義し、これらの作品群が文学史の重要な構成要素であると述べている。<sup>(2)</sup> 筆者は、陳氏のこの概念を援用することで、『胡志明』を日本統治期末期の台湾新文学における「潜在創作」として文学史的に位置づけられるのではないかと考え、「潜在創作」としての呉濁流『胡志明』論」(以下、前稿と略記)<sup>(3)</sup>を發表した。ここでは、『胡志明』と他作家による同時代公表作品とを比較することで、公表作品において表現不可能であった台湾人の精神性がこのテクストに留められていること、抑圧された時代においても台湾知識人の批判精神が存在したこと、このテクストが公表作品に課せられた表現上の制約や、その曖昧な表現の深層を窺う参照枠ともなりうることを明らかにし、『胡志明』の同時代における意義を指摘した。<sup>(4)</sup>

『胡志明』の文学史的意義を確認した上で、この度検討したいもう一つの方向性は、テクスト改編の問題である。戦後五十年代に、『胡志明』は、『アジャの孤児』(以下、『アジャ』と略記)と改題され、また内容にも手が加えられ、日本で出版されることとなった。先行研究ではすでに、『胡志明』を約六割に縮め大幅に改作したものが『アジャ』であることや、両テクストの異質性も指摘されている。<sup>(5)</sup> しかしながら、この二篇のテクストについて全体を通じた検討や圧縮・削除の理由についての考察、更には、『アジャ』という新たなテクストが日本で生まれることになった必然性についての探求は未だなされていない。そこで本稿は、台湾と日本で刊行された二つのテクストの全面的な比較を行う。その考察結果と、四五年から五十年代にかけての台湾と日本の歴史的背景、日本における受容の経緯、また日本人読者の反響といったことを併せ見ること、『胡志明』が『アジャ』として刊行されるに至った要因に迫りたいと思う。

吳濁流は、一九〇〇年六月二日、新竹州・新埔の客家の家系に生まれた。漢民族の伝統的な教育の場であった「書房」が閉鎖されたため、彼は公学校に入学し、十六歳の時に総督府国語学校師範部に進学した。同校卒業後は公学校など台湾人の初等教育に関わる教員となるが、現場における軍隊式の管理体制を批判するなどして、僻地の学校へ度々左遷された。四十歳の頃、職場での台湾人教員に対する侮辱に憤って職を辞すと、汪兆銘政権の官吏を務める友人を頼って南京に渡り、『南京大陸新報』の記者として活躍する。しかし日本敗戦の色彩が濃くなったため、家族ともども一年後に帰台することとなった。この時の大陸経験は、「南京雜感」や「南京要人印象記」として公表された。<sup>(6)</sup> 帰台後は、『台湾新報』<sup>(7)</sup> 新聞社の記者となり、台北帝国大学の学者であった工藤好美や中村哲、また画家の立石鉄臣らと親交を結んだと言う。こうした日本人との交流も、『胡志明』の内容に大きく影響しているものと思われる。彼は旧詩に優れ、二十年代後半から苗栗詩社（大新吟社）に参加しており、三十代に入ると新文学の活動にも着手し、「どぶの緋鯉」〔『台湾新文学』一卷五号〕ほか、三篇の日本語小説を発表するが、統治下の台湾において、以降は作品を公にすることなく、四三年から四五年にかけて『胡志明』を秘密裏に創作したのだ<sup>(8)</sup>。

一九四五年度の「光復」後、旧植民地の日本語教育を受け、日本語が思想・表現の手段となっていた台湾知識人のなかには、反帝・反封建・郷土の描写といった、台湾新文学以来の精神を受け継ぐ独自の文化を、日本語の創作によって花開かせようとした者もあった。<sup>(9)</sup> 当時、『台湾文化』など中国語使用の雑誌のほかに、台湾文化再生の気概

に燃えた台湾人作家たちは、中国語と日本語が併用された『新知識』、『台湾評論』、『新新』などの雑誌や『人民導報』、『中華日報』などの新聞を次々と世に送り出してゆく。<sup>(10)</sup> 例えば、龍瑛宗や呉濁流が編集に関わった『中華日報』には日本語欄が設けられ、台湾人作家の創作がしばしば掲載された。しかし、時の陳儀政府は、日本語を「奴隸化」の象徴と見做し、公の場から排除すべく、四十六年十月二十五日より、新聞・雑誌上の日本語欄禁止を発令した。呉はこの時、台湾の文化のために日本語の新聞雑誌を「永久に自由に発刊を許すべき」ことを訴えている。<sup>(11)</sup> 呉のみならず、多くの台湾知識人が新聞や雑誌上で反対の意を唱えた。<sup>(12)</sup> もっとも、日本語欄の禁止令によって、ただちに日本語の新聞欄や書籍出版が停止されたわけではなかった。最近の研究により、四十七年の二・二八事件から一九四九年の四・六事件（白色テロ）までは、台湾において比較的自由な言論空間が持続された時期であったことが、明らかになっている。<sup>(13)</sup> 実際のところ、呉自身の回想に、「二二八事件のために「民報の倉庫内に十ヶ月眠って」いた『胡志明』第五篇の原稿が、四十八年一月になって公刊されたところから、この時期にも日本語創作の発表の場があったことは推察される。<sup>(14)</sup> この四十六年から四十八年にかけて、彼が「陳大人」(『新新』、四十六年)や「先生媽」(『民生報』、四十六年)、「光復」後の台湾における台湾人女性と大陸から来た中国人男性との婚姻を描いた中篇『ポツダム科長』(私家版、四十八年)<sup>(15)</sup>といった小説を台湾の雑誌に発表し、『中華日報』の日本語欄にも評論を寄せるなど、文化再建の気運の高まるなか、精力的な執筆活動を展開していったことも注目される。<sup>(16)</sup>

しかし四十九年に戒嚴令が公布され、五十年代に入ると、台湾の公共空間における言語統制は強化されて行った。<sup>(16)</sup> そうした理由もあってか、この時期、呉は日本語作品発表の場を求めるように、『アジャ』(五十六年)や、同作を改題した『歪められた島』(五十七年)を日本で刊行し始める。台湾においても中国語により、当時タブーであった二・二八事件に言及した自伝的作品である『無花果』(『台湾文芸』十九・二十一期、六十八年)<sup>(18)</sup>や、また四十九年に起こった

白色テロの時代を描写した『台湾連翹』の第一部を連載（『台湾文芸』三九―四五期、七三年）しており、一方、『無花果』が収められた『夜明け前の台湾―植民地からの告発』や『泥濘に生きる―苦悩する台湾の民』（以上、七二年）などの自伝的長編作品を陸続と日本で発表し、こうした一連の流れの末に、『アジアの孤児―日本統治下の台湾』（七三年）を再刊していることが分かる。

呉はしかし、言論言語統制の困難な時期に勇気をもって作品を公表しただけでなかった。七六歳でその生涯を閉じるまで、台湾人の言論の自由を求め、台湾の歴史を作品化し続けるとともに、晩年には私財を投じ「吳濁流文学賞」を設立して、若手作家育成の礎を築いた。こうした彼の生き方は、戦後台湾の後輩作家を大いに励まし、強い影響を与えることとなったのだった。<sup>(20)</sup>

## 二 『胡志明』とその版本について

それでは始めに、本論が扱う『胡志明』と『アジアの孤児』の両テキストについて紹介したい。

一九四三年から四五年にかけて、日本統治末期の台湾で創作された『胡志明』は、五篇六一章からなる、約三六万字におよぶ日本語長編小説である。<sup>(21)</sup>ここで『胡志明』各篇の執筆と刊行の状況について、副題・脱稿時期・刊行年・出版社の順に述べてみたい。なお、脱稿時期とは、各篇の末尾にそれぞれ記された年月に拠るものである。

篇	副題	脱稿時期	刊行時期	出版社
第一篇	なし	一九四三年四月	一九四六年九月	国華書局
第二篇	悲恋の巻	一九四四年九月	一九四六年十月	国華書局

第三篇	悲恋の巻	大陸篇	一九四四年十二月	一九四六年十一月	国華書局
第四篇	桎梏の巻		一九四五年四月	一九四六年十二月	民報総社
第五篇	発狂の巻		一九四五年六月	一九四八年一月	学友書局

各篇の内容について簡単に述べれば、第一篇では、主人公胡志明（台湾人）の台湾における幼少期から青春期までが描かれ、日本人女性に対する失恋を機に日本「内地」へ留学するまでが語られる。また、第二篇では「内地」留学から帰台した後、婚約者となった台湾人女性の自殺に衝撃を受け、大陸に渡るまでが綴られる。第三篇では、渡華先の上海において出会った中国人女性との結婚生活とそれが崩壊していく有様や、日本敗戦の色彩が濃くなり、身の危険を感じた彼が独り帰台するまでが語られる。第四篇では、皇民化政策時期の台湾の様子が細かく映し出され、つづく第五篇では、決戦時期の台湾の情景が記されるとともに、肉親を戦争のためになくした胡志明がついに発狂に至るまでが述べられている。

次に、『アジャ』の版本であるが、左に示すように三種類あり、いずれもが日本で刊行されている。

題名	刊行年	出版社
一 『アジャの孤児』（『アジャ』を指す）	一九五六年	一二三書房
二 『歪められた島―植民地台湾からの告発』	一九五七年	ひろば書房
三 『アジアの孤児―日本統治下の台湾』	一九七三年	新人物往来社

一の『アジャ』は、五篇四八章、約二万字からなるテキストである。ストーリー展開は概ね『胡志明』に即したものとなっている。三の七三年に出された版が、現在最も人口に膾炙したテキストであり、呉濁流『アジアの孤児』研究の底本として専ら用いられてきた版といえるだろう。また、これら日本語のテキストを底本とする主要な中国

語翻訳版が四種類出されている。<sup>(22)</sup>

本論において、『胡志明』と比較すべきテキストとしては、右に示した日本語版の三種の版本が当てはまるが、『歪められた島』と『アジアの孤児』の両テキストとも『アジャ』と分量的にはほぼ変わらず、内容にも本論の議論に関わる大きな差異は認められない。ゆえに以下、『胡志明』との比較に言及する際は、初版である『アジャ』を用いることとした。

### 三 先行研究の検討

#### 三― 先行研究から

次に、先行の研究を挙げておこう。従来の研究は、『胡志明』第五篇が未発掘だったこともあり、『アジャ』以降の版本や、その中国語版に拠るものが主であった。<sup>(23)</sup>『胡志明』に依拠するものは、現時点で次の二篇を除き見当たらないと言えるだろう。

その一つが、龍瑛宗「傳統の潜在力―吳濁流氏の「胡志明」」<sup>(24)</sup>である。龍氏は、この作品が「日本語といふ表現を用ゐる」ながら「小説の構成といひ、テンポといひ、ニヤンスといひ、疑ひもなく、中國文學の傳統を引ゐて」おり「消え行く風俗を、文學という形象を通じて保存し」ていること、「散漫」な印象のなかに、「作家の文學に対する態度」すなわち、「昔風の東洋文人の面影」<sup>(25)</sup>が感じ取れるとし、作品には「怒れる魂と抗議」が看取れる一方で、「すべてのアングルをこれに注るでない」ことを指摘する。これは、第一篇に限った評であり、作品全体を論じたものではないが、台湾人日本語作家の表現、つまり「日本語で書かれながら中国文學の流れを受け継いでいる」

ことを理解し得る同時代人のものとして貴重である。

そしてもう一つが、河原功氏による「『胡志明』について」(以下、河原(〇七)と略記<sup>26)</sup>)である。ここでは、『アジャ』は『胡志明』を六割程に縮めた作品であり、戦争描写を中心とする第四、五篇は分量が半分以下に縮小されるなど、両者を同一作品と見ることに慎重になるべきことが示唆されている。また『胡志明』第二篇に登場する台湾人女性・月英が『アジャ』で削除された理由について、主人公が彼女を救うために「聘金」を払う行為が、新時代を志向する人物や作者の生き方と矛盾しており、この描写が小説構成を不均衡にしていたためだと述べる。更に、第四、五篇を中心にして『胡志明』の方が、植民地体制や皇民化政策、戦時下の台湾についての情景描写が細かく、また強い批判的描写がそこに現れていること等が指摘されている。『アジャ』との比較の上に作品の特徴を端的に捉えた初の『胡志明』論と言えよう。

この二編から『胡志明』の特徴を大きくまとめるならば、(1) 日本語作品でありつつ中国文学の風格があり、(2) 植民地制度により消滅させられる台湾の風俗が描写され、(3) 小説の散漫な印象が作者の東洋文人の気質によるものであること。また、(4) 第四、五篇を中心にして、戦争批判の表現が強烈であり、(5) 戦時下の台湾(人)の様子が、『アジャ』より細かく描かれているということになるだろう。

ただし、これらの論に対して疑問も残らないわけではない。まず、龍瑛宗が述べたような、植民地下における「台湾風俗」の描写や、小説の「散漫」な書きぶりが、改編されたテキスト『アジャ』全篇ではどのように扱われているのかをさらに精査する必要があるだろう。また、河原氏の論は主として四、五篇を中心に分析しており、第二篇から第三篇に関しては検討の余地を残している。さらに、果たして主人公と婚約するまでの間柄となる台湾人女性月英の描写は、氏の示すような、主人公の「生き方」に反するという理由や「構成上の不均衡」といった理由



によってのみ削除されたのかという疑問がある。これについては例えば、李郁蕙氏が「吳濁流『アジアの孤児』論——その地政学的配置とジェンダー——」において、主人公を取り巻く女性の表象の持つ地政学的な意味——それは日本統治期の台湾新文学にしばしば表れる——を分析した観点からも、検討すべきように筆者には思われるのだ。

### 三二二 「潜在創作」としての吳濁流『胡志明』論の概要

さらにここで、本稿と連続する筆者の前稿について、概要を述べておきたい。

日本統治期台湾の検閲制度は資料未発掘のために全貌はまだ明らかにならず、研究もようやくその緒にいったばかりである。その中、残存する三十年代の検閲制度に関する法令『台湾出版関係法令釈義』を調査した河原功氏は、「日本統治期台湾での「検閲」の実態<sup>(27)</sup>」において、台湾に特化した条例として「内台融和を阻害する事項」「台湾の独立を慫慂<sup>マヤ</sup>し又は民族意識を唆ること甚だしき事項」「台湾総督を誹謗し其の威信を失墜<sup>ア</sup>する事項」「台湾統治並に施政方針に対し悪宣伝を為し、民度低き島民に疑惑の念を抱かしむる事項」といった規定があったことを明らかにし、書籍に関しても、大陸から輸入される出版物で中華意識を刺激するものは悉く発売禁止になったと論じている。<sup>(28)</sup> こうした考察を踏まえれば、四十年代の台湾の検閲がこれにも増して厳格であったことは推測されよう。では、公にものを言うことが極めて困難な植民地台湾において、秘密裏に創作された『胡志明』は「潜在創作」であるがためにどのような表現が可能となったのか。

当時の他の作家による公表作品と『胡志明』の表現を対照させれば、『胡志明』には(1) 中国大陸、(2) 植民地政策に対する批判、(3) 反封建制を軸とした台湾新文学の一大テーマであり、同時に娯楽的性格をも合わせもつ恋愛・結婚・女性問題という描写のあることが分かる。これら三つの描写は、戦時下の台湾では、規制の対象と

なる可能性が高く、同時期の台湾人作家の公表作品には、ほとんど出てくることはない。

こうした描写からは、(1) 中国人女性／台湾人の大陸体験／大陸で戦闘に関わる台湾人兵士の描写など、中国を描くことで、植民地台湾のアイデンティティの複雑性が映し出されていくということ。(2) 決戦時期台湾の政策について忌憚なく批判している「潜在創作」である『胡志明』と、公表作品の曖昧・迂回した表現を付き合わせれば、公表作品の表現に別の精神性が潜む可能性を示し得ること。(3) 台湾新文学のテーマであった蓄妾問題とその描写のあり方を考察すれば、反封建を主要なテーマとした台湾新文学の精神が『胡志明』にも継承されていることが読み取れるのである。

無論、「潜在創作」は作者の主観に拘束されるため、テキストの表現をそのまま当時の知識人に普遍的な意識と読み替えることはできない。しかしこの『胡志明』を「潜在創作」と捉えることにより、表現の自由が抑圧された戦時下の台湾においても、台湾知識人の批判精神が存在していたことや、またこのテキストを通して公表作品の読みの可能性が広がることを、筆者は前稿において明らかにしたのである。

#### 四 『胡志明』から『アジャ』へ——その改編をめぐる

それでは、日本統治期の「潜在創作」であり、「光復」後には台湾人読者にむけて公表された『胡志明』が、日本において日本人の読者向けに『アジャの孤児』として出版された理由を探ってゆこう。版本内容についての具体的な検討に入る前に、テキストを取り巻く台湾の言語環境と日本の思想界の状況について述べたい。

#### 四一 「光復」前後の公共空間における台湾の言語環境

日本統治期の台湾では一九三七年、新聞雑誌上で漢文欄が禁止されたことによって、台湾の漢文作家は創作発表の場を失い、その大半が筆を折ることを余儀なくされた。そしてこれに代わって、植民地の日本語教育を受けて育った台湾人知識人の中から日本語作家が登場し始め、四五年の終戦まで活躍することとなる。植民地台湾の初等教育は一八九九年から一九四四年にかけて、国民学校の数が約一〇〇校と十倍になり、学生数はおよそ九万人に達し、九〇倍以上にも膨れあがった。さらに中・高等教育についても、一九四四年には大学一校、専門学校ならびに師範学校が各五校、中等学校が四六校に拡大した。このような植民地下の日本語教育を通じて、さらにそれを土台として「内地」で高等教育を受けた台湾人エリートが、台湾の文学界で活躍するのが三七年から四五五年の時期だった。<sup>(29)</sup> 四五年、日本の投降により「光復」を迎えた台湾は、中華民国に接収された。しかし、日本語は光復後も台湾のメディアにおいて使用され続けた。例えば、文化宣伝委員会の『台湾新生報』、国民党台湾党部による『中華日報』、軍系統の『和平日報』、民間の『民報』や脱植民地化が強く志向された『人民導報』などの新聞において、日本語と中国語は併用された。

だが、陳儀政府は、台湾における日本語の普及を理解しつつも、これを排除し中国語を第一の公用言語とすることを目指した。一九四六年四月、当局は教育の「祖国化」を目的に「台湾省国語推進委員会」を設立し、「台湾省国語運動要綱」を發布する。これによって、国語の推進運動が展開されて行った。同年九月十四日、中学校における日本語使用が禁止され、翌月の十月二十五日には、新聞、雑誌における日本語の使用禁止の布告が出されたが、こうした強硬な言語政策は、多くの台湾知識人の反発を招くこととなった。<sup>(30)</sup> 日本語や日本文化の全面否定とは、日本植民地下の教育のもと、日本語を思考や書記言語とせざるを得なかった彼らにとって、言葉を奪われること、つ

まり「自己喪失にもなりかねないこと」だったからであった。翌四七年に起こる二・二八事件の要因の一つとして、この日本語禁止措置による本省人の不満の高まりが指摘されてもいる。<sup>(31)</sup>しかし一方で、四七年の二・二八事件から一九四九年の四・六事件まで、「国共内戦にかかわり」、「比較的自由的な言論空間が持続され」、台湾知識人と「国民党主流とは別個」の「大陸出身の進歩的知識人」らによって台湾の「脱植民地化」と「近代中国の建設」が進行されつつあったことも明らかになって来ている。それは、アメリカ合衆国の対中国政策の開始にともない、捨て置かれまいとする国民党政府が、「一定の慰撫政策」を行った時期とも重なっていた。<sup>(32)</sup>しかし、四八年には「各県市国語推進委員会」が設置されるなど、当局による国語政策は着実に推進され、四九年の四六事件以降は、台湾では本格的に言語統制が強化された行だった。

「光復」後、日本語は公的言論空間から徐々に閉め出されてゆき、五十年代に入ると日本語作品自体が公表できなくなつてゆく。台湾側の経緯に鑑みれば、このことが一つの要因となつて、『アジャ』の日本刊行に繋がつていったと考えられるのではなからうか。

#### 四―二 戦後日本の文学思潮（四五年から五十年代）について

では、それを受け入れた日本の土壌はどのようなものだったのか。次に、終戦後から五十年代にかけての日本の文学思潮を振り返ってみよう。

一九四五年、広島・長崎に原子爆弾が投下され、八月十五日に日本は終戦を迎えた。戦後日本の知識人は、戦争責任の問題と向かい合い、四六年には『近代文学』や、旧プロレタリア文学系の作家や評論家によって戦後民主主義文学の樹立を目指す『新日本文学』（一月創刊）が立ち上げられ、文壇では戦犯の追求問題が起こった。『近代文

『学』においては、その同人である荒正人・小田切秀雄・埴輪雄高・平野謙・佐々木基一・本田秋五らにより、座談会「文学者の責務」が開かれ、戦後最も早い文学者の戦争責任追求が行われた（『人間』四六年四月号）。また『新日本文学』においては、文学者の戦争責任について、具体的に戦争協力者の名を挙げて戦前の文学の「実情を徹底的に追求」し、「文学観念や文芸思潮がどんなふうになまされまた転落させられ」、「文学的創造の源泉」が「全き枯渇にまで追いやられたか」をはっきりと見究め、「新文学の創造の道を清め、ふみ固め」「新しい文学的創造の開花」を促すための糾弾が行われた（小田切「文学における戦争責任の追及」『新日本文学』四六年六月）。極東軍事裁判の判決があった四八年、文壇では平和運動が起こり、知識人の共産党への入党が相次いだ。四九年、文芸家協会によって「文学者と平和擁護について」の声明が発表され、五一年には加藤周一が『抵抗の文学』（岩波新書）を著して、戦時中のフランスのレジスタンス文学を紹介したことにより、抵抗文学が文壇の注目を浴びる。そして五五年には『日本抵抗文学選』（二書房）が刊行され、戦時中の抵抗文学を発掘しようとする動きもあらわれた。四四年には、詩人による戦争責任論が起こり、日本が国連に加盟した五六年には左翼文学批判が活発化してゆく。安保改定阻止闘争が起こった五九年、文学界では「戦争体験論の意味」（橋川文三）が書かれ、思想の方面でも『戦後日本の思想』（中央公論社、一九五九年）が一斉に発刊された。このように、日本の戦後十年間は、戦前への猛省とそれを踏まえての再出発の時期にあっていたのだ<sup>33</sup>。

以上、見てきたとおり四五五年以降は、台湾においては「光復」後五十年代までの言語統制があり、日本においては戦後五十年代までの文学・思想界における戦争責任追求・反省の思潮があった。こうした、二つの歴史的文脈があわさったことが、日本における『アジャ』の刊行を後押しする要因となったことを押さえておきたい。

## 五 両テキスト間の異同について

ではテキストの具体的な検討に入ろう。『胡志明』は『アジャ』として戦後の日本で公表されるに当たり、どのように改編されたのであろうか。ここでは、『胡志明』と『アジャ』の二つのテキストを比較し、改編によって変化した『胡志明』の表現について考察を進めたい。

今再び、『胡志明』の梗概を振り返り、ストーリーを確かめておこう。

### ・第一篇 主人公の幼少期から青春期まで

主人公の胡志明は、漢学者の祖父の意向により書房に入り、四書五経を習っていた。書房の先生は漢学を教授することによって、日本の統治に思想的に反抗していた。ところが書房が閉鎖されたので、胡志明は公学校に入学し、その後、国語学校教師範部を経て公学校に就職した。胡志明はそこで台湾人教師の不公平な境遇や、日本人教師の台湾人児童への虐待を目の当たりにする。彼は職場の日本人女性教師久子に好意を寄せ告白するが、民族的理由から拒絶され、傷心を抱えたまま「内地」に留学する。

### ・第二篇 主人公の青春時代

東京留学の四年間、胡志明は台湾人の身分を公表できない苦しさを体験する。一方、下宿先の大家の娘に恋心を抱くもののその思いを胸に秘め帰台することとなる。故郷では、疎外感を味わうとともに、就職先のない状況に失望し、ついに自らの留学経験を否定するまでになる。そんな時、兄が分家騒動を引き起こす。また、金満家の妾になる運命から救いたい一心で婚約した台湾人女性が、その金満家によって侮辱され、絶望して自

殺する痛ましい事件が起きる。良心の呵責に苛まれた胡志明は、安心立命の地をもとめて大陸へと旅立つ。

### ・ 第三篇 主人公の青年時代

貧富の差の激しい、「俗悪」かつ「不衛生」な中国（上海）の現状に胡志明は驚く。北京語のトレーニンングをかさね、現地で日本語教師となった胡志明は、かつて列車の中で出会った蘇州美人と再会し、恋に落ち結婚する。しかし「モダンガール」の彼女は、形だけの政治運動に参加し、家庭を顧みない人間だった。三十年代の中国では抗日運動が起り、国共内戦も盛んになっていた。ある晩、台湾人の身分を怪しまれた胡志明は、自宅で特高警察に拘禁される。教え子の協力でなんとか軟禁状態から脱出し上海に逃れるが、上海も混乱状態に陥っており、身の危険が迫った彼は、家族を残して帰台することを決意する。

### ・ 第四篇 主人公の青年時代より壮年期

七七事変後日中戦争の勃発によって、台湾も戦火に巻き込まれ、巷では皇民化の風が吹き荒れている。胡志明は抑圧される民衆に同情しながら、兄をはじめとして皇民化政策を推進する台湾人や、行政の名のもとに台湾人を欺く日本人に憤る。殺伐とした状況のなか胡志明は心の平穩を失っていく。

### ・ 第五篇 主人公の壮年時代

太平洋戦争が始まると、台湾では「特別志願兵制度」が喧伝され、台湾人青年の招集が強制的に行われる。人々は戦力確保のために動員され、物資や金品を徴収され、臨戦態勢を強いられる。胡志明は政策に批判的で「日本精神」についても懐疑的だった。そこへ義理の弟の戦死のしらせが入り、その衝撃によってついには発狂してしまう。

『アジャ』のストーリーも、第二篇の月英の描写を除けば、大筋としてはこれとさほど変わらない。では改編時

の変更にはどのような特徴があったのだろうか。ここで指摘し得る箇所を幾つか挙げてみたい。その一つは語句の異同である。『胡志明』から『アジャ』に改編されるにあたり、例えば「湾生」から「台湾生まれ」、「當局」から「軍」、また「国内」から「島内」というように、日本統治下の台湾における用語が日本人読者向けの言葉に改められている。その他、主人公の名前が胡志明から胡太明へと変化している。これは胡志明という名前が当時、共產主義体制下にあったベトナムの指導者ホーチミンの中国語名と重なり、彼への揶揄と誤解されることを避けて変更したのだという。これらの相違も読者対象を意識した改編と言えるが、更に重要なのが、内容の圧縮・削除箇所である。

河原（〇七）は先述の通り、改編の際の主要な変更点を挙げている。ただし、それは圧縮・削除された描写の指摘に留まり、その理由に関する考察は保留された印象を受ける。また主として『胡志明』の第四、五篇を検討の対象としており、第一篇から第三篇については、月英の描写を除きほとんど言及されていない。そして、この月英の描写について言えば、氏は「胡志明が月英の身の上に同情して旧習である聘金を用意してまでも結婚へのアクションを起こすというのは、新時代を志向する胡志明そして呉濁流の生き方と矛盾」<sup>34</sup>するため、『胡志明』第二篇の中でも座りのよくない一段」を構成上の均衡を保つ必要から削除したと述べる。だが、全篇の削除箇所と合わせ見たとき、台湾（漢民族）の抱える女性問題（陋習）を、日本における公表の際に如何に扱ったのかという点において他の理由が浮上してくるものと思われる。

そこで以下に、「表一 『胡志明』から『アジャ』への改編にあたり削除・圧縮された箇所一覽」を示し、削除・圧縮された『胡志明』の描写箇所を、全篇を通して拾い上げてみたい。



表一 『胡志明』から『アジャ』への改編にあたり削除・圧縮された箇所一覧

『胡志明』(章) ↓ 『アジャ』(章・章題)

改編にあたり削除・圧縮された描写内容

○第一篇

序↓序

一章前半↓一章「苦棟の花の咲く頃」

一章後半↓二章「雲梯書院」

七章↓全て削除

八章↓九章「彭秀才を葬う」

十章前半↓十一章「青春の慟哭」

十章後半↓十二章「波濤を越えて」

『胡志明』全五篇に各々付された序の合体・縮小版

書房の傍らに住むいじわるばあさんの話

台湾の旧正月

主人公の童養媳、妾制度、聘金婚に対する考え

台湾式の葬儀、細かな情景

祖父から影響を受けた中庸の思想

渡日の際に詠じる漢詩

「日本籍民」としての渡日ではないという誓い

※分量は約七割に圧縮。(『胡志明』六九三〇〇字↓『アジャの孤児』四七八四〇字)

○第一篇

一章後半↓二章「異郷の花」

二章↓三章「ふたたび故国へ」

三章↓三章「ふたたび故国へ」

四章↓五章「阿玉の悲しみ」

五章↓削除

六章後半↓七章「新生活」

八〜十章↓九章「大陸の呼び声」

日本の習慣や自然への親しみ、日本人女性への賞賛

台湾にやって来た佐藤の植民地に対する見解

叔父・阿片桶のホラ話

父の妾と分家問題

台湾人女性月英

保正と警察の癒着

兄の畜妾問題、同族婚への恐怖

※分量は約五割に圧縮。(六八四〇〇字↓三六四〇〇字)

『胡志明』(章) ↓ 『アジャ』(章・章題)

改編にあたり削除・圧縮された描写内容

○第三篇

二、三章 ↓ 二章 「淑春」

祖国の階級問題に対する在中台湾人の認識  
中国社会の不衛生な様子

十章 ↓ 十章 「さらば大陸」

三七年以降の上海租界の不穏な様子  
中国人の妻との間に生まれた愛娘への思い

※分量は約七割に圧縮。(七〇二〇〇字 ↓ 四八八八〇字)

○第四篇

三章 ↓ 二章 「戦いの陰に」

五章 ↓ 全て削除

七章 ↓ 五章 「回復期」

兄による皇民奉公会への積極的参加  
主人公による人間存在への問い

一般の台湾人による「国語家庭」に対する蔑視  
日本人兵士の中国人殺戮

八、九章 ↓ 全て削除

十章 ↓ 六章 「母の死」

十一章 ↓ 六章 「母の死」

十三章 ↓ 六章 「母の死」

十四、十五章 ↓ 七章 「虐げられる青春」

祖国に派兵される台湾人兵士の家族の胸中  
戦時下の台湾服や信仰の規制、納税の厳格化  
主人公と百姓によるアジア情勢談義  
正條密植  
羽供出運動  
勤勉な台湾の百姓に対する賛辞、歴史上の英雄批判  
日本の戦局に対する台湾民衆の見方

※分量は約五割に圧縮。(七四四四八字 ↓ 三六四〇〇字)

○第五篇

二、三章↓二章「新たな職場」

七章↓全て削除

八、十章↓五章「虎狼の府」

十、十三章↓六章「皇民派の悲哀」

十五章↓八章「犠牲」

※分量は約五割に圧縮。(七八九三六字↓三九五二〇字)

政府統制機関内における汚職の実態

配給制度

「模範」的存在であった在台日本人の本性

長い間「皇民化」教育に従事した台湾人教師の内心

植民地体制に批判的な佐藤の言動

台湾人に課された苛酷な勤労働員の実態

主人公による「無用不協力」の提唱

歴史上の英雄や独裁者への批判

次に、表一に示した削除・圧縮された描写について、(A)「台湾人の形象」、(B)「日本人の形象」、(C)「漢民族の文化伝統」、(D)「主題に直接関係しない要素」、(E)「そのほか」という、五つのカテゴリーに分けて、その特徴を述べてみたい。

(A) 台湾人の形象

第一に、主人公が①日本留学中に日本の習慣や自然美に親しんだり、日本人女性の所作に関心する情景【二篇】が削除されている。これは、植民地の同化政策により、「押し付けられた」植民者の文化を、台湾人が抵抗なく、むしろ好意的に受け入れる様子が、抑圧された台湾人の姿を前景化しようとする小説の方向性を曖昧にするとして、削られた可能性が指摘できよう。

第二に、台湾人（漢民族）の女性問題を描いた、②童養媳、③聘金結婚、④父の妾【以上、一篇】、⑤妾がいる家庭の分家問題、⑥妾となる運命にある台湾人女性月英、⑦兄の妾問題と嫁の苦しみなどの箇所が削除されている。また、⑧台湾人保正と警察の癒着、⑨同族結婚の末に「リアー」（台湾人への別称）が生まれることを極度に危惧する台湾人の姿【以上、二篇】、⑩台湾人が祖国の階級問題に無頓着な姿【三篇】、⑪米穀統制機関付属協会の汚職【五篇】など、植民地下にあつて単なる被害者ではない台湾人の種々相がなくなり、抑圧される側のキャラクターはそのまま残されている。

第三に、⑫主人公の兄による皇民奉公への積極的な参加、⑬国語家庭への台湾人の蔑視【四篇】、⑭「皇民化」に専心する台湾人教員の苦衷など、皇民化政策に対する台湾人の極端な反応や苦悩の描写も少なくなり、これにより「虐げられる台湾人」の形象が強化されたものと思われる。

#### (B) 日本人の形象

他方、日本人の形象にも同様の措置が認められる。それは、①民族的偏見のない「内地」人の鶴子【二篇】や、②植民地に批判的な佐藤の描写【二、五篇】が圧縮・削除されているところから推察できる。特に、主人公も好感を持つ佐藤は、植民地下では日本人も「本島人に対して素直にものが言えない。言う前に必ず影響があるかないかを考える」ため、「人間の清い霊が触れ合う筈がない。」<sup>(35)</sup>などと独特な価値観を有する人物である。しかし、こうした日本人の発言や行動は、植民者としての日本人の形象を弱めると考えられたためか、大幅に圧縮・削除されているのだ。他方、③日本人が中国人を殺戮する話【四篇】や、④日本精神の範を示す存在であるはずの日本人が、戦時の困窮した状況で狡猾な本性を露呈する様【五篇】など、日本人の残酷面や醜さの描写も削られている。ここから日本人読者に対する作者の配慮をも感じることができらるだろう。

(C) 漢民族の文化伝統

日本人読者向けの変化という側面からみれば、全篇を通して、漢民族の文化習慣や考え方、例えば①漢詩・四字熟語・成語、②台湾の旧正月、③中庸の思想【以上、一篇】、④台湾式葬儀【二篇】など、「消え行く風俗を、文學という形象を通じて保存してゐる」<sup>(36)</sup>と評された『胡志明』の特徴的描写が大きく削られていることが確かめられる。これらは日本人読者に疎遠なものとして、最小限に留められたのであろうか。

(D) 主題に直接関係しない要素

また例えば、①悪戯な書房の子どもを眼の敵にするいじわるばあさんの話【一篇】、②主人公の叔父のホラ話や、父の妾をめぐる喜劇【以上、二篇】など、娯乐的な要素がなくなっている点も指摘したい。その他、③細かな情景描写【一篇】や、④中国の階級問題、⑤中国社会の不衛生さ【三篇】といった観察的叙述も削られている。さらに、主人公が⑥人間存在の意味を進化論を用いて考えたり、⑦百姓とアジア情勢談義をしたり、⑧勤勉な彼らを賛美する場面が大きくカットされている。また⑨正條密植、⑩無用不協力の提唱、⑪歴史上の「英雄」への再検討【五篇】罪者だと言うシーン、⑫戦局に対する見解【四篇】、⑬無用不協力の提唱、⑭歴史上の「英雄」への再検討【五篇】等々、人物や出来事の逐次的説明もなくなっている。

(E) そのほか

しかし、なかには削除・圧縮の理由を見出し難い箇所があることも述べておかねばならない。それは、①主人公が渡華の際に、「日本籍民」として渡るのではないと誓う場景【二篇】、②三七年以降の上海租界における日本人を取り巻いた危険、③中国人女性との間にもうけた娘への愛情【三篇】、④祖国に派兵される台湾人兵士の家族の感情【四篇】、⑤勤労働員により子どもを奪われた台湾人老母の姿【五篇】などである。特に①、③、④、⑤は日本

統治下の台湾人として、民族的孤立や虐げられた境遇を浮き立たせる上で重要な表現であるにも関わらず、『アジャ』で削除されていることは不可解と言わざるを得ない。<sup>(37)</sup>

以上のように、『アジャ』となるにあたり、もともと『胡志明』では豊かにあった「台湾人」や「日本人」の形象がステレオタイプ化され、そのなかで畜妾制といった台湾人が抱える大きな問題もなくなり、日本人読者には疎遠な「漢民族の文化伝統」に関する描写が一部に留められ、娯楽的な要素や説明的な記述など「主題に直接関係しない要素」も相当程度そぎ落とされたことが確かめられる。

こうした改編を経て、確かに『アジャ』は『胡志明』に較べて民族の形象が固定してゆき、構成や表現が引き締まった。だが逆に言えば、『胡志明』の主人公が中庸の立場を取ったりあるいは「中間人物的」な形象であるがゆえに表現できた、統治下の台湾人の内面的葛藤というものや、民族に拘らない人間の多様な様相が消滅し平板化してしまったのである。更に切迫した当時でなければ作家が書き留められない生々しい感情や、<sup>(38)</sup>植民地台湾で実際に起きた様々な出来事が除外されたことにより、日本統治期の「潜在創作」としての意義をもったテキストが、別種のテキストに生まれ変わっていったことが分かる。この、日本人向けの『アジャ』の再編成については、一一『胡志明』とその版本（五頁）で示したように、五七年版『歪められた島』の副題が「植民地からの告発」となっているところからも裏付けられるだろう。

## 六 『アジャ』に対する日本人読者の反応

では、このように作者が意識的に改編したと考えられる『アジャ』は、日本において如何なる経緯のもと出版されたのか。そこに関与した日本人はどのような人物だったのだろうか。また、日本人読者の反響は如何なるものであったか。以下、これらの点について窺ってみたい。

#### 六一― 日本出版の経緯と日本人読者の反応

左に示した表二「日本における『アジャ』の出版経緯」は、最も詳しく版本の経緯が書かれていると思われる傳恩栄訳『亜細亜的孤児』(六二年)<sup>(39)</sup>の作者序と、各版本に附された前書きや後書きの記載に拠り作成したものである。

表二より、『アジャ』の日本での出版にあたり、工藤好美、中村哲、早坂一郎、立石鉄心、坂口禰子、矢野峰人といった、錚々たる元在台文化人の関与が明らかである。①、②からは、彼らが、戦後すぐに出版のために奔走し

表二 日本における『アジャ』の出版経緯

①	一九四五―四六年頃	工藤好美の助力により「雄鶏社」から出版予定。経済問題で頓挫。
②	一九四六年頃	文学界において早坂一郎や坂口禰子による紹介あり。
③	一九五六年四月	『アジャの孤児』(二三書房)として出版。
④	一九五七年六月	『歪められた島』(ひろば書房、立石装丁、村上・中村序)として出版。
⑤	一九五七年	矢野峰人が紹介。各種雑誌紙にても紹介 <sup>(40)</sup> 。
⑥	一九六二年四月	尾崎秀樹評「決戦下の台湾文学―植民地の文学」(『文学』四月号)。
⑦	一九七三年五月	『アジアの孤児』(新人物往来社)として出版。

たことが窺い知れる。当初、第一篇で完結予定であった『胡志明』の続篇執筆を強く勧め、日本に引き上げた後も手紙で作者を激励し続けたという元台北帝大の工藤好美や、戦前の台湾文学界を代表する作家である坂口禊子、画家の立石鉄心については、呉の漢詩からも交流の跡を看取できる。<sup>(41)</sup> もっとも、こうした五十年代の出版に際する日本人の関与は、戦前以来の個人的な関わり以外にも、先述した小田切秀雄の「文学における戦争責任の追求」に示されるような、四十年代後半期から始まる、日本の文壇内部における戦前の文学に対する猛省といった動向と合わせて考える必要があるだろう。

そして、出版関係者がこの作品を如何に重視していたかを、③一二三書房（五六年）↓④ひろば書房（五七年）↓⑦新人物往来社（七三年）と、出版社を変えながら三度刊行された経緯が物語っている。⑦の巻末にある「再刊に際して」で作者は、『アジャ』から二十年もの時を経ての再版にあたり「植民地体制の本質を新たに考えようとする心ある日本人がおられることに頭が下がる」と記しているが、その背景には、松永正義氏が指摘するように「七二年の日中国交回復」を機に「にわかには台湾に対する関心が高ま」り、「呉濁流の作品が続けて刊行され」たり、「各種の雑誌が台湾特集を組ん」だことがあるのだろう。<sup>(42)</sup> つまり七十年代の場合も、日本内部の必然性により刊行が後押しされたものと考えられるのである。

それでは、日本で出版された『アジャ』を、日本の知識人たちはどのように受け止めたのか。その代表的な例として、テキスト③並びに④に付された三名の著名人の声を聞いてみたい。一人目は、台北帝大の教授であった中村哲（一九二二—二〇〇四）である。二人目は、作家の村上知行（一八九九—一九七六）である。そして三人目が、在台二世で大衆文学者として知られる尾崎秀樹（一九二八—一九九）である。

在台日本人のエリートであった中村は、<sup>(43)</sup> 植民地台湾の政治的重圧の中で、「台湾出身の知識人が心の底をもって



いたもの」に触れることがあったと当時を振り返る。そして、「現在のような歴史の転換期」に「この島に起った人間の記録」を、この作品から日本人は見直す必要があると述べ、政策に加担した日本人としての責任を明らかにしている。同時に作者の日本語について、「台湾で育った、この世代の人々だけがもっている最後の教養の開いた花」、「中国文学と日本文学の架橋となるかけがえのないもの」として、植民地という場において生ぜざるを得なかった負の文化遺産が、今後は二つの文化を橋渡しする存在たり得ると、積極的な価値を見出そうとしている。

村上<sup>(44)</sup>は日本語を母語とする者には獲得しえない新たな日本語の存在を指摘しつつ、「歪められた島」は「中国語によって甦生し、中国文学として、残す」価値があることを強調している。さらにこの作品が「はじめから日本語でかんがえられ」「かかれた」「非常に特殊な文学」であり、「レジスタンスのありえない台湾に芽ばえた、幼ない、悲しい、よわよわしいレジスタンスの文学」であると述べ、「こういう中国人の、こういう苦しみもあった」ことを日本人は「義務的に知らなければならない」とする。村上は主として言語的側面や台湾と中国との関係から、この作品の特異な価値を見出そうとしている。日本人としての戦後責任を強く意識した評であるとともに、氏の用いた「レジスタンス文学」の形容によって、五十年代の日本の思潮のなかで、この作品を捉えようとしていることが確かめられる。

台湾に根を持つ尾崎<sup>(45)</sup>は、日本のスパイとして祖国の同胞に受け入れられず、宗主国日本の植民地支配により抑圧され、「戦争」によって祖国と宗主国の間で板ばさみになる台湾人の姿こそ、この小説の重要な点であると力説する。他方、植民統治に批判的な佐藤が登場するところから、「日本人」統治者の手先」という構図に作者が始終していないことも洩らさず指摘している。こうした氏の評からは、改編にあたって日本人の描写がステレオタイプ化され、多様性を持たせる描写が削除対象になりつつも、なお佐藤のような植民地政策に批判的な日本人が、小説内

に留められたことは、この形象に対する作者の思い入れとともに、日本人読者に対する一定の配慮がはたらいたことを考えさせる。

最後に、かつて植民地台湾の役人だった日本人読者からの反応を見ておこう。六二年に台湾で出版された、博恩栄訳の中国語版の扉には、元皇民奉公会本会宣伝部長の大沢貞吉なる人物からの手紙が掲載されている。そこには『歪められた島』の印象が次のようにしたためられているのである。

…あれまでの日本文をつづられたご苦心 それを逆にいうと、あれだけの文章がお書けになるまでに日本統治下で歪められた大兄の御辛苦が深く同情されました

全くあの小説の内容のような日本統治であったことは事実でしょう。

今になってこの小説を日本人官吏が（台湾にいた）見たら果たしてどう感ずるかが私の興味の一つです。その官吏の片棒をかついだ私なども反省の機会が与えられたような気がいたします。

台湾で出された中国語版に、かつて植民地支配を遂行した側の人間の「反省」の弁を載せるといふことは、同胞に対して自分たちの思いが日本人へ届いたことを報せ、また現在の日本人の台湾理解がどのように変化したかを伝える意味も込められていたことだろう。

これらの日本人読者の反応を窺えば、戦前の植民地問題を反省し、戦後日本人がどうあるべきかについて内省する一つの契機を、『アジャ』が強く促したであろうことが推察される。その意味から、小説のメッセージ性を強化し再編した作者の戦略は成功したと言えるのではなからうか。

## 六一二 改題とテーマの変化について

こうした作者の意識は、『胡志明』第四篇の序にある、「原稿を勝手の炭籠にためて、それが一定量溜まると田舎へ疎開し保存した」というエピソードや、第五篇の最終場面の「ああ、胡志明はついに発狂した。／心あるものよ、誰か発狂せざるにいられようか」などの文言が、『アジャ』の自序に全て引用されているところからも確かめられる。つまり作者が改編にあたり、特に『胡志明』第四、五篇の主題とした皇民化政策時期の台湾というテーマを、小説全体を貫く軸として、再編成しようとしたことが確かめられるのである。このような細部の変化と、再刊にあたって主人公の名前を題名に採らず、『アジャの孤児』と変えた理由、さらに五七年の再版の題名が『歪められた島』となり、その副題が「植民地台湾からの告発」とされているところにも、日本刊行における改編の方向性を読み取ることができるものと考ええる。

### おわりに

本稿では、日本統治期台湾で書かれた『胡志明』と、戦後日本で出版された『アジャ』とのテキスト比較を通じて、日本において一般に知られる『アジャ』は、原本『胡志明』の描写を、相当程度そぎ落とし、植民者である日本人や中国と日本のはざままで孤立する台湾人という、それぞれの形象を強化したものであることを示した。また、日本の植民がいかに台湾の人々の人間性や精神を蹂躪するものであったかを訴える内容を軸とした物語へと、再編成されたものであることも論じた。さらに、「光復」後台湾の言論統制によって日本語作品の公表の場が消滅していったこと、戦後日本における戦争責任の追求・反省や抵抗文学の発掘という思潮があいまって、日本という市場

にける刊行が促進された可能性を指摘した。以上の考察から、植民地時代から戦後に到る、台湾と日本の言論空間を取り巻く様々な力学のもとに、『胡志明』が『アジャ』として改編され、日本で刊行された要因を多少なりとも明らかにし得たものと思う。

最後に、今後検討すべき事項を二点挙げておきたい。(1)中国語版の検討。これはテキスト内に用いられる言語の問題(例えば主人公の郷里で話される言語が河洛語か客家語かという問題)と絡めて考察する必要がある。しかしこのことは、本プロジェクトの域を超えるため機会を改めて考えてみたい。(2)「光復」後の台湾文化と戦後の日本思想界の動向について認識を深めること。本稿は当初、『胡志明』と『アジャの孤児』の二つの長編作品の比較を行い、純粹なテキスト論として分析を進めるつもりであった。だが、改編のありかたと日本刊行の理由を結びつけるためには、時代の文脈のなかでそれを考える必要に迫られた。現段階で筆者にはこの方面への認識が不足していることを自覚する。これらの課題に答えるにはなお一定の時間を要するため、引き続き考究してゆきたい。

#### 〔付記〕

学習院大学東洋文化研究所による二〇〇八年度「東アジア学」共創プロジェクトを通して本プロジェクトを進める機会をいただきました。東洋文化研究所の皆さまに深く御礼申し上げます。特にプロジェクトの実施にあたり、一貫してご鞭撻いただいた高柳信夫先生に、衷心より御礼申し上げます。また、台湾・苗栗調査の折にお力添えいただいた黄美娥先生(台湾大学)・詹雅能(東南科技大学)ご夫妻、ならびに呉濁流芸文館の余依姍氏に感謝申し上げます。

注

- (1) 拙稿「日本統治期台湾新文学にみる台湾知識人の精神史」(大阪市立大学大学院文学研究科博士論文、二〇〇八年)。
- (2) 復旦大学出版社、一九九九年、十二頁。
- (3) 『現代中国』第八三号、二〇〇九年。
- (4) 「光復」後の『胡志明』刊行に際し、執筆時期(日本統治期の一九四三年―四五年)のテキストに対して書き換えが行われたか否かは、『胡志明』にも他の資料にも触れられていない。もちろん、書き換えるのあった可能性は否定できないが、判断材料が一切ないため、前稿では『胡志明』の刊行時に書き換えがなかったものとして論じている。
- (5) 河原功『『胡志明』について』『呉濁流作品集』緑陰書房、二〇〇七年、四八九―五三六頁。
- (6) 「南京雑感」も「南京要人印象記」もともに『台湾芸術』に連載されたとされる。しかし該当部分については、台湾中央図書館分館所蔵のマイクロフィルム資料に収録されていないため確認が取れない。『呉濁流選集』(廣鴻文出版社、一九六六年)に中国語訳が収録されている。
- (7) 総督府の新聞の統一政策により、当局直属の『台湾日日新報』に『台南新報』、『台湾日報』、『高雄新報』、『台湾新聞』、『南日本新報』の五紙が統合された。一
- (8) 創作文語に日本語を選んだ理由には、彼が「客家」の出であることを考慮する必要もあるが、この点については本論ではこれ以上触れない。
- (9) 座談会「談台湾文化的前途」(『新新』第七号、一九四六年十月十七日)。ただすべての日本時代の作家が過渡期において日本語使用を望んだわけではなく、葉石濤が小説「紅鞋子」(『紅鞋子』自立晚報社文化出版、一九八九年)に表したように、中国語への言語転換を行おうとした作家もいた。
- (10) 『台湾文化』は「台湾文化協進会」の機関誌。一九四六年九月十五日―五十年十二月一日。台湾文化協進会発行、全六卷二七期。台北にて創刊。当初、創作・評論・學術論文が掲載された中国語総合雑誌。／『新新』は娯楽性に富む民間の総合誌。一九四五年十一月二〇日―四七年一月五日。全八号。新新月報者発行。創作・評論・漫画・文化紹介・時事・國語講座など掲載。日本語が主として用いられたが、第三期の巻頭が中国語で書かれて以降、中国語作品が多くなった。／『新知識』は台中の文化人中心に編集。一九四六年八月十五日発行、台中市中央書局発行、月刊全一期。二六編の論述のなか、日本語によるものに楊清華「台湾經濟の過去及び現在」がある。／『台湾評論』は左翼系の雑誌。一九四六年七月一日―同年十月一日、台湾

- 評論社出版、全四期。五十編の論述の中（うち中国語の日本語対訳を含める）、楊逢「台湾の現実を見凝めて―人民の声を聞け」など、十五編の日本語による文章が見られる。／『人民導報』は左翼系紙。一九四六年一月一日―四七年三月十七日。台北で創刊。全三期。全四面からなり、第三面が日本語版、第四面が「南虹」と呼ばれる副刊。散文・小説・新詩など文芸作品を掲載。二・二八事件を含め戦後台湾社会の問題に言及した。／『中華日報』は中央宣伝部直属の機関紙。一九四六年二月二〇日―四六年十月二四日、全四十期。台南で創刊。祖国復帰したばかりの台湾民衆が、中国国内の情報を得られるように日本語版も設けられた。四六年三月十五日から日本語版に文学創作をのせる日本語欄が設けられた。一九四六年六月二二日に、呉の評論「一つの現実逃避―聖烽演劇の発表会」掲載。（以上は主として、『台湾旧雑誌刻印系列』（伝文化事業有限公司）の翻刻とそれに付された各雑誌の縁起、彭瑞金著／中島利郎・澤井律之訳『台湾新文学運動四〇年』（東方書店、二〇〇五年）ならびに葉石濤著／中島利郎・澤井律之訳『台湾文学史綱』（研文出版、二〇〇〇年）に付された訳注を参照。）
- (11) 呉濁流「日文廃止に対する管見」『新新』第七号、一九四六年十月十七日、十二頁。
- (12) 張・G・S「本省人と日本語」『新新』第七号、一

- 一九四六年十月十七日）、龍瑛宗「台湾はどうなるか」、趙天麟「神の御声を聞く」、陳金生「国語熟達の日まで」、陳輝瑜「日文版よさらば」、陳雲鵬「日文版の終焉に際して」、孫林茂「国文学習に張切る」、孫土池「別れのペンを擱く」、『中華日報』特集「さらば日文版よ 同人ら別れの花束」、一九四六年十月（四日）
- (13) 主要な研究として、丸川哲史「台湾における脱植民地化と祖国化―二・二八事件前後の文学運動から」（明石書店、二〇〇七年）がある。
- (14) 『胡志名』第五篇あとがきに見える。
- (15) 一九四七年十月八日脱稿。一九四八年五月に台湾・学友書局より出版。『ポツダム科長』に登場する台湾女性の表象をめぐる地政学的な分析については、前掲注十三の丸川氏「台湾における脱植民地化と祖国化」、第二章「光復後の脱植民地化と「省籍」問題―文学作品の表象分析を中心にして―」に詳しい。
- (16) 日本語の公共空間における禁止については、菅野敦志「一九五〇年代台湾における文化的脱植民地化と「日本」」『現代中国』第八一号、二〇〇七年、一七四頁。
- (17) 一九六四年四月、呉は台湾文芸雑誌社を創立し、雑誌『台湾文芸』を創刊した。
- (18) しかし翌年に掲載禁止となり、竹内好らが主催する雑誌『中国』（東京：中国の会）に、全篇揃って訳載

された。編集部訳とあるが、訳者は飯倉昭平と言われる。一九七〇年、台湾・林白出版社から出版が企画されたが発禁となった。

(19) 『胡志明』では、主人公が「無花果」のようにひっそりと確かに実を結ぼう、「台湾連翹」のように自己の個性を曲げずに生きようと決意する場面がある。『胡志明』第五篇、五―六頁。ここから『無花果』や『台湾連翹』の題が取られたと考えられる。『台湾連翹』は一九七五年一月に完稿したが、作者本人の意思で発表が十年間凍結させられた。一九八七年、鍾肇政の中国語訳により台湾文芸社から出版された。

(20) 吳濁流が亡くなった翌年（一九七七年）、張良澤氏の編集により『吳濁流作品集』（全六巻、遠行出版社）が台湾で出版されるが、第三巻の『波茨坦科長』が発禁となった。一九九六年、新竹県文化中心によって「吳濁流館」が建てられた。

(21) 字数については、『胡志明』は河原（〇七）に示された数値を用い、また後述する『アジャ』はテキスト一頁が一〇四〇字（二六字×二十行×二段）として概算した。

(22) 中国語（翻訳）版は次の通り。（1）楊召憩訳『孤帆』高雄・黄河出版、一九五九年。底本は『アジャ』／（2）博恩采訳『亜細亜的孤児』台北・南華出版、一九六二年。（1）と呉による加筆の翻訳／（3）『孤

帆―亜細亜的孤児』台湾・泛亞出版、一九六五年。（1）の再版／（4）『亜細亜的孤児』『吳濁流選集』、台湾廣鴻文出版社、一九六六年。（2）を収録／（5）張良澤編『亜細亜的孤児』台北遠行叢刊・吳濁流作品集1、一九七七年。（2）を収録。九十年代以降の版と大陸出版本については省略する。

(23) 従来の研究は『アジャ』あるいはそれを底本とした中国語版に拠るものが多い。とくに本論の議論とも関わる先行研究に李郁蕙「吳濁流『アジアの孤児』論―その地政学的配置とジェンダー」（『日本台湾学会報』第二号、二〇〇〇年）、丸川哲史「植民地台湾における文化と世代―吳濁流『アジアの孤児』再読―」（『アジア新世紀』第六巻、岩波書店、二〇〇三年）がある。

(24) 『中華日報』日本語欄、一九四六年九月二八日。とは、次のような龍の中国文学観に基づくと考ええる。

「…近代の小説から論ずれば、消えゆく生命に対する魂の哭泣は聴えるが、しかし作品としては渾然たる藝術味がなく、構成も内容も緻密とは言えない。それにも拘らず、われわれは、そこに一派の中國的性格を見付け出すのである。官僚政治の一部腐敗部分に對する嫌惡と糺弾は抗議するヒューマニズムであるし。混沌と動亂の中に悠々と享樂と有閑哲學を打ち樹てる―」（『老殘遊記』、『中華日報』日本語欄、一九四六年六

月一日)、「東洋の作品の背後は社会が紛失している。そこは東洋の不幸が胚胎してゐる」(『浮生六記』「中華日報」日本語欄、一九四六年九月十二日)。「近代小説」の観点から、伝統文学における社会性の欠如、有閑の性格、哲学思考、政治への抗議的性格等が指摘されている。引用は日本語版『龍瑛宗全集』(南天書局、二〇〇八年)。

(26) 『吳濁流作品集』緑蔭書房、二〇〇七年、四八九—五三六頁。同論は若干の加筆を経て氏の著作『翻弄された台湾文学—検閲と抵抗の系譜』(研文出版、二〇〇九年)に収録。同氏「吳濁流《胡志明》研究」(『台湾文学学報』第十期、国立政治大学台湾文学研究所、二〇〇七年)も参照。

(27) 『東洋文化』第八六号、東京大学東洋文化研究所、二〇〇六年。同論は一九三〇—三二年の『台湾出版警察報』(台湾総督府刑務局保安課図書掛)に基づく考察である。(前掲の『翻弄された台湾文学』収録)。

(28) 前掲注二七頁、河原「日本統治期台湾での「検閲」の実態」。また本論中の引用も氏の論述に拠る。

(29) 黄英哲『台湾文化再構築の光と影』(創土社、一九九九年)うち、第六章「文化再構築に対する台湾知識人の反心」一七九頁参照。

(30) 丸川氏によれば、一九四六年の時点で、台湾各地の地方会議では、暫定的に新聞における日文版の存続が

認められるよう議決議も行われた。(同氏『台湾における脱植民地化と祖國化』)

(31) 何義麟「『国語』の転換をめぐる台湾人エスニシテイの政治家—戦後台湾における言語紛争の一考察」(『日本台湾学会報』第一号、一九九九年)参照。また、松永正義氏は(台湾人の反対議論が)「すべて無視される形で日本語欄が廃止されたことは、二・二八事件の潜在原因のひとつになったとも考えられるが、こうした過程は、日本語が自らの思想を表現する重要な手段であるということ強く意識されたものと思われる」と述べる(同氏「戦後台湾の「国語」問題」『一橋論叢』一三一—三三三号、二〇〇四年)。

(32) 本節は以下の文献を参照した。前掲黄『台湾文化再構築の光と影』、前掲丸川『台湾における脱植民地化と祖國化』、中川仁『戦後台湾の言語政策—北京語同化政策と多言語主義』(東方書店、二〇〇九年)。

(33) 本節は主として以下の文献を参照した。加藤周一『抵抗の文学』(岩波新書、一九五一年)、『日本抵抗文学選』(三一書房、一九五五年)、『戦後日本思想体系—戦後思想の出發』、『戦後日本思想体系 十三—戦後文学の思想』(以上筑摩書房、一九六九年)。

(34) 前掲注二六、河原(〇七) 四九九頁。

(35) 『胡志明』(緑蔭書房、二〇〇七年) 第五篇三六頁。

(36) 前掲注二五、龍瑛宗「傳統の潜在力」。



(37) ただし①は『アジアの孤児』において再び復活している。

(38) 『アジャ』序ならびに『胡志明』第四篇序を参照。

(39) 台北・南華出版社、一九六二年。

(40) 作者呉濁流は、傅氏訳『亜細亞的孤児』の「由日文翻訳中文的経過」において、五七年の再版に辺り、『中央公論』七月号、『朝日新聞』（朝日画報台湾特輯号）、『東京内外時報』、『愛光新聞』において、この作品が取りあげられたと記しているが、調査の限りでは見当たらない。

(41) 前掲注二二の張良澤編『呉濁流作品集』漢詩篇に、工藤には、「除日在病床寄工藤教授」（一九五三年）など合計十首、坂口には「八代市訪坂口禰子不遇有感」など合計四首、村上には「謝村上知行贈書」など計二首、その他、「與金関教授叙旧」「遙送中村教授遊歐洲經過高雄」「與杉森久英、中村教授、立石画伯、尾崎等叙旧」など収録。作成日時の分かるもののみ明記。

(42) 松永正義「日本における台湾文学の研究について」『言語文化』第三十号、一橋大学語学研究室、一九九三年。

(43) 中村哲「序」『歪められた島』、ひろば書房、一九五七年。

(44) 村上知行「序」『歪められた島』、ひろば書房、一九五七年。

(45) 尾崎秀樹「決戦下の台湾文学―植民地の文学」(岩波『文学』四月号、一九六二年) 四〇二―四〇三頁。

# 从《胡志明》到《亚细亚的孤儿》

## ——关于文本的改编

丰田周子

关键词：《胡志明》（『胡志明』），《亚细亚的孤儿》（『アジヤの孤児』），发行再版原委（刊行・再刊の経緯），文本改编（テキスト改編），读者反响（読者の反響）

台湾作家吴浊流（1900-76）在言论非常受限制的日据时期台湾，为我们留下了记录受压迫的台湾人形象的日语长篇小说《胡志明》。

这篇小说在战后，被改题・改编为《亚细亚的孤儿》并在日本被出版。但是先行研究指出《亚细亚的孤儿》是由小说《胡志明》压缩并经大量改编而成。

本文试图对改编部分和改编理由进行讨论，并通过考虑台湾和日本双方的历史文脉、发行和再版的原委以及读者的反响等要素、来对小说《胡志明》被改编为《亚细亚的孤儿》并在日本被发行的背景进行考察。